首都大学東京　東京都立大学　人文学報第455号抜刷

死すべき運命の顕現化と博愛プライムが内集団ひいきに及ぼす効果

沼崎　誠
天野陽一
石井国雄
廣瀬綾乃
高林久美子
埴田健司

首都大学東京都市教養学部　人文・社会系
東京都立大学人文学部
2012.3

死すべき運命の顕現化と博愛プライムが内集団ひいきに及ぼす効果[1)]

沼崎　誠[2)]
天野陽一[2)]
石井国雄[2)]
廣瀬綾乃[3)]
高林久美子[4)]
埴田健司[4)]

本研究は，存在脅威理論（Terror Management Theory: 以下 TMT と略記）に基づく多くの研究で示されてきた，死すべき運命の顕現化（Mortality Salience: 以下 MS と略記）によって生じる内集団ひいきが，博愛概念の活性化によって止揚されるかを実証的に検討するものである。

TMT は非常に多くの社会的行動を説明するグランド・セオリーである (e.g., Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997; Pyszczynski, Greenberg, & Solomon, 2005; Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991)。TMT は，ヒトの特徴として，他の動物と共通して持つ「自己保存への本能的傾向」と，他の動物と相違する「不可避の死を認識できる」ことをあげる。この２つの特徴から，ヒトは根元的に自己の存在に脅威を感じるので，この脅威を無力化する，生き続けるために必要な潜在的な力―文化―を必要とする。文化とは自然世界を意味の世界（文化的世界観）へと変換するシステムであり，文化的世界観は世界は安定的で秩序があり有意味だと示唆するよう人の知覚を組織化する概念や構造を提供するため，死の気づきによって生じる存在論的不安を緩和するという重要な機能を果たすことになる。なぜなら，文化価値基準に適合することは，文字どおりの不死（不死の魂や死後の世界といった精神的概念）や象徴的不死を提供するためである。

TMT は，このように検証困難な進化論的前提をおくが，この前提から実証

可能な仮説を導き出すことができる。多くの研究で実証されてきた仮説はMS仮説と呼ばれるもので，人々に死すべき運命を思い出させれば自己価値や文化的世界観への信頼の感覚を妥当化しようとする欲求が生じるであろう，という仮説である。MS状況では，自己の文化的世界観を支持する人や思想への魅力が高まり，文化的世界観を侵害する人や思想への反発が増大することが多くの実証研究によって示されている(e.g., Greenberg, Pyszczynski, & Solomon, 1990; Harmon-Jones, Greenberg, Solomon, & Simon, 1996; McGregor, Lieberrman, Greenberg, Solomon, Arndt, Simon, & Pyszczynski, 1998)。日本人大学生を参加者にした研究でも，Heine, Harihara, and Niiya (2002) は，死に関する自由記述を行うという最も典型的な操作をしたMS条件では，統制条件に比べ，日本文化を非難する外国人を低く評価するというMS仮説を支持する結果を報告している。

このように，TMTに基づく研究では，自文化中心主義の強化や外集団成員への攻撃行動の強化 (e.g., Hirschberger & Ein-Dor, 2006; Pyszczynski, Abdollahi, Solomon, Greenberg, Cohen, & Weise, 2006) といったネガティブな行動に焦点が当てられることが多かった。しかし，TMTは，MS状況では文化的世界観防衛がなされることを予測するものであり，ポジティブな行動が生じることも予測でき，近年では特定の状況では偏見の低下を示すといったポジティブな行動にも焦点が向けられるようになっている。

TMTの初期の研究でも，MS状況では良い行いをした人に対する報酬が増える (Rosenblatt, Greenberg, Solomon, Pyszczynski & Lyon, 1989)，MS状況では慈善団体への募金が増える (Jonas, Schimel, Greenberg, & Pyszczynski, 2002) といった研究があった。また，Greenberg, Simon, Pyszczynski, Solomon, and Chatel (1992, Study 2) は，アメリカ人を参加者にして，寛容 (tolerance) 概念をプライムすることにより，MS状況での反アメリカ的エッセイを書いた外国人に対する好意の低下が抑えられることを見いだしている。

近年では，特定の文化的世界観をプライムすることによって，MSの外集団へのネガティブな行動の増加が抑制され，むしろポジティブな行動が生じやすくなることを示す研究がおこなわれている (Pyszczynski, Rothschild, & Abdollahi, 2008)。例えば，Rothschild, Abdollahi, and Pyszczynski (2009) は，ア

メリカ人のファンダメンタリストを参加者として，友愛（compassion）をプライムしない場合や，非宗教的友愛プライムでは，MS がアメリカ防衛のための極端な攻撃的行動への支持を高めるが，宗教的友愛プライムをすると，MS が攻撃行動の支持を有意に低めることを見いだしている。また，イラン人を参加者とした反アメリカ態度でも同様の結果を見いだしている。また，Motyl, Hart, Pyszczynski, Weise, Maxfield, and Siedel（2011, Study 1）では，アメリカ人の家族の写真を見せたときには，死すべき運命を顕現化するとアラブ人に対する潜在的偏見が高まるが，様々な文化を持った人々が共通の体験をしている写真を見せ人類の共通性をプライムしておくと，死すべき運命が顕現化してもアラブ人に対する潜在的偏見が生じないこと，有意ではないものの統制条件に比べ MS 条件ではアラブ人に対する潜在的態度が好意的になることを見いだしている。さらに，その後の実験において，異文化の人との共通経験を顕現化するといった別の操作を行い，顕在測度を用いても，同様の結果を得ている（Motyl et al., 2011, Study 2)。このように，寛容や友愛や人類共通性をプライムすることにより，MS による外集団性員への偏見や攻撃といったネガティブな効果を低減，そして逆転させることが可能であることが実証的にも示されている。

本研究は，これら知見を 3 つの点で拡張しようとするものである。第 1 に，外集団ばかりではなく内集団への態度も測定した。先行研究においては，外集団への態度のみを測定しており，内集団への態度が測定されていない。そのため，宗教的博愛プライムや人類の共通性のプライムによる MS の相対的にポジティブな効果が，外集団に対してのみ向けられるのかが明らかではない。そのため，本研究では，内集団と外集団に対する態度の双方を測定して，MS 状況で増大する内集団ひいきが本当に抑制されるのかを検討した。

第 2 に，本研究では非宗教的博愛プライムの効果を検討する。友愛プライムを検討した Rothschild et al（2009）では，ファンダメンタリストにおいて宗教的友愛プライム（聖書から引用した友愛に関する格言の評定）がポジティブな効果を持つことを見いだしているが，非宗教的友愛プライム（友愛に関する格言の評定）はポジティブな効果を見いだしておらず，また，非ファンダメンタリストにおいては宗教的友愛プライムも非宗教的友愛プライムも MS の効果を調

整していなかった。本研究では日本において身近に接触する音楽と映像を用いて非宗教的博愛プライムを行うことにより，相対的に宗教が希薄といわれている日本において博愛プライムが効果を持つかを検討した。

第3に，本研究では，MS状況でないときには，ネガティブな評価を受けづらい外集団への態度について検討をおこなった。先行研究においては，MS状況でなくてもネガティブな態度が向けられた外集団（e.g., アメリカ人にとってアラブ人）が研究の対象となっていた。本研究においては日本における外国人留学生という必ずしもネガティブな評価を受けていない外集団と日本人大学生という内集団を対象にして，ネガティブではない外集団と比較した内集団ひいき的態度がMSによって生じるのか，また，この効果が博愛プライムによって止揚されるかを検討した。

これら3つの点を検討するために，日本人を実験参加者として，死に関連した質問項目に回答させるかによってMSの有無を操作した後，音楽にあった写真を選ぶ課題によって博愛概念か日本文化をプライムした。その後，外集団である複数の外国人留学生と内集団である日本人大学生を，個人的親しみやすさと社会的望ましさと能力の次元で評価をさせた。仮説として，「死すべき運命が顕現化した時には，日本人大学生に比べ外国人留学生への評価が低下するが，死すべき運命の顕現化後に博愛概念を顕現化させると，内集団ひいきが生じない，または，むしろ逆の傾向が見られるであろう」を設けて検討した。

方　法

実験計画　MS（MS vs. 統制）×プライム（博愛 vs. 日本）×特性（個人的親しみやすさ vs. 社会的望ましさ vs. 能力）×評価対象（外国人留学生 vs. 日本人大学生）の混合要因計画であった（後2者が参加者内）。

実験参加者　日本人首都大学東京男子大学生46名。回答に不備のあった1名を除く45名が分析の対象者となった（MS- 博愛条件：11名，MS- 日本条件：12名，統制 - 博愛条件：12名，統制 - 日本条件：10名）。

実施時期　2010/11/24 ～ 2010/11/29。

手続き　3-6名の集団で女性実験者が，複数の学部学生の卒業研究に参加する

ように依頼し，同意書を取得した上で実験を実施した。第1研究は「個人差に関する調査」として複数の尺度に回答させ，その中でMSの操作を行った。MSの操作は死に関連する質問紙に回答するか否かによって操作した（e.g., 野寺・唐沢・沼崎・高林, 2007; 沼崎, 2005; Rosenblatt, et al., 1989, Study 6)。具体的には，沼崎（2005）と同様に，MS条件では死に関連する32項目の尺度に回答させた。統制条件では死に関連する質問項目の代わりに，歯科治療に関連する項目に回答させた。

第2研究は「音楽と写真のイメージに関する調査」として，プライムの操作を行った。具体的には，音楽を聴かせ，その音楽ジャケットを複数の写真の中から選択させる3課題を行った。第1課題と第3課題がプライム操作のための課題で，博愛プライム条件では予備調査で博愛と関連すると評定された「小さな世界（It's a small world)」と「ウィ・アー・ザ・ワールド（We are the world)」のサウンドトラック版を聴かせ，博愛イメージを持つ写真4枚の中から1枚を選ばせた。日本プライム条件では予備調査で日本的であると評定された「笑点」と「風の通り道（映画「となりのトトロ」より)」を聴かせ，日本文化イメージを持つ写真4枚の中から1枚を選ばせた（Appendix 1参照)。第2課題は両プライム条件に共通の課題で，「子犬のワルツ」を聞かせ，子犬を含む4枚の動物の写真の中から1枚を選ばせた。

第3研究は「留学生イメージに関する調査」として，従属変数を測定した。「アメリカ人留学生」「中国人留学生」「韓国人留学生」「イラン人留学生」「日本人大学生」の順でイメージを7件法で15特性について回答させた。評定特性15項目は，個人的親しみやすさを測定する5項目（親切な - 不親切な，思いやりのある - わがままな，温かい - 冷たい，親しみやすい - 親しみにくい，好ましい - 好ましくない）と社会的望ましさを測定する5項目（きちんとした - だらしのない，責任感のある - 責任感のない，誠実な - 不誠実な，真面目な - 不真面目な，信頼のおける - 信頼のできない）と能力を測定する5項目（学力の高い - 学力の低い，知的な - 知的でない，有能な - 無能な，優秀な - 優秀でない，頭の良い - 頭の悪い）であった。

最後にディブリーフィングをおこない，実験を終了した。

結　果

中国人留学生，アメリカ人留学生，韓国人留学生，イラン人留学生，日本人大学生に関して，「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「能力」ごとに得点が高いほど好意的であるように平均値を求め5），この値を用いて分析を行った（各条件の平均値と標準偏差はTable 1に示した）。内集団ひいきを明確にするため，最初に外国人留学生と日本人留学生を比較する分析を行い，次に，評定対象者ごとに分析を行った。

Table 1　各留学生と日本人大学生の条件ごとの特性の平均値と標準偏差

		Japan Prime		Philanthropy Prime	
		Control	MS	Control	MS
China Students	Familiarity	3.86 (0.80)	3.30 (0.94)	3.10 (0.54)	3.20 (1.07)
	Social desirability	4.80 (0.44)	3.65 (0.97)	3.95 (0.78)	3.87 (0.79)
	Ability	5.58 (0.93)	4.80 (0.71)	4.83 (0.95)	5.13 (0.82)
American Students	Familiarity	5.02 (0.54)	4.20 (0.76)	4.82 (0.82)	4.98 (0.74)
	Social desirability	4.36 (1.07)	4.17 (0.65)	4.57 (1.14)	4.29 (0.43)
	Ability	4.94 (0.82)	4.90 (0.99)	5.68 (0.74)	4.82 (0.93)
Korean Students	Familiarity	3.90 (0.86)	3.50 (1.04)	3.78 (1.01)	3.75 (1.17)
	Social desirability	4.54 (0.82)	4.12 (0.58)	4.17 (0.95)	4.40 (1.26)
	Ability	4.96 (1.15)	4.63 (0.62)	4.55 (0.92)	500 (1.18)
Iranian Students	Familiarity	5.06 (0.86)	4.68 (0.74)	4.65 (1.28)	4.64 (0.62)
	Social desirability	5.04 (0.78)	4.73 (0.98)	4.22 (1.13)	4.71 (0.58)
	Ability	5.04 (1.16)	4.55 (1.34)	4.40 (0.98)	4.35 (0.88)
Japanese Students	Familiarity	5.00 (0.48)	4.80 (1.01)	4.40 (0.92)	4.27 (1.25)
	Social desirability	3.32 (0.47)	4.03 (0.75)	4.02 (0.84)	3.76 (0.61)
	Ability	3.94 (0.51)	3.92 (0.81)	4.37 (0.72)	3.82 (1.15)

外国人留学生 vs. 日本人大学生　外国人留学生の評定値として，3特性ごとに4つの国の留学生の平均値を求め，この値と日本人大学生の3特性の評定値とを用いて，MS×プライム×対象×特性の混合要因の分散分析を行った。結果として，対象の主効果と特性の主効果と対象×特性の交互作用とプライム×対象×特性の交互作用が有意であった（$F(1, 41) = 6.35, p < .05$; $F(2, 82) = 11.37, p < .001$; $F(2, 82) = 31.77, p < .001$; $F(2, 82) = 3.44, p < .05$）。プライム×対象×特性ごとの平均値はTable 2に示した。

対象の主効果は，日本人大学生（$M = 4.14$）に比べて外国人留学生（$M = 4.45$）に対する評価が全体として高いことによるものであった。この結果は，全体としては内集団ひいきが生じていないことを意味する。対象×特性の交互

Table 2　留学生全体・日本人大学生のプライムごとの特性の平均値と標準偏差

		Foreign students	Japanese students
Familiarity	Japan Prime	4.17 (0.45)	4.89 (0.94)
	Philanthropy Prime	4.11 (0.51)	4.34 (1.07)
Social desirability	Japan Prime	4.40 (0.47)	3.71 (0.82)
	Philanthropy Prime	4.27 (0.47)	3.90 (0.73)
Ability	Japan Prime	4.91 (0.75)	3.93 (0.85)
	Philanthropy Prime	4.85 (0.54)	4.10 (0.97)

作用は，日本人大学生は個人的親しみやすさにおいて相対的に評価が高いが，外国人留学生は社会的望ましさや能力において相対的に評価が高いことによるものであった．プライム×対象×特性の交互作用は，日本人大学生の個人的親しみやすさの相対的に高い評価が，博愛プライム条件に比べて日本プライム条件において顕著であることによるものであった。

これらの効果に加えて，最も重要なことには，MS を含む効果では，仮説から予測される MS ×プライム×対象の交互作用のみ有意になった（$F(1, 41) = 4.18$, $p < .05$）。この効果を検討するため，3 特性の平均値を求め，外国人留学生から日本人大学生の評定値を引き，点が高いほど外国人留学生に対して好意的になるように得点化したものを Figure 1 に示した。日本プライム条件では，MS 条件は統制条件に比べて，外国人留学生への相対評価が低いのに対して（$F(1, 41) = 3.50$, $p = .07$），博愛プライム条件では，有意ではないものの，MS 時に相対評価が上昇した（$F(1, 41) = 1.02$, $p = .32$）。この結果は，死すべき運命が顕現化した時には，日本人大学生に比べ外国人留学生への評価が低下するが，死すべき

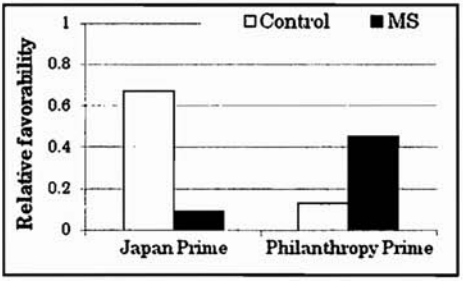

Figure 1. 外国人留学生に対する相対評価

運命の顕現化後に博愛概念を顕現化させると，内集団ひいきが生じない，または，むしろ逆の傾向が見られるであろうという仮説を支持するものであった。

中国人留学生　中国人留学生に対する評定に対して，MS ×プライム×特性の混合要因の分散分析を行った。特性の主効果が有意であった（F (2, 82) = 78.73, p < .001）。中国人留学生は，能力は高く評価されていたが個人的親しみやすさは相対的に低く評価されていた。この効果に加え，MS を含む効果では MS ×プライムの交互作用のみが有意であった（F (1, 41) = 6.00, p < .05）。3 特性の平均値を求めた指標の，条件ごとの平均値を Figure 2 に示した。日本プライム条件では，MS 条件は統制条件に比べ評価が低下したが（F (1, 41) = 9.22, p < .01），博愛プライム条件では MS の効果がみられなかった（F (1, 41) = 0.16, *ns*）。この結果は，MS 状況では外集団への評価が低まるが，博愛概念が活性化していると，この効果が消失することを示すものである。

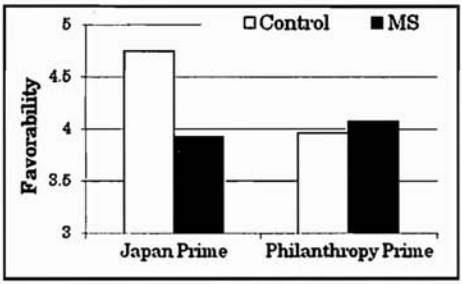

Figure 2. 中国人留学生に対する評定

アメリカ人留学生　アメリカ人留学生に対する評定に対して MS ×プライム×特性の混合要因の分散分析を行った。特性の主効果が有意であった（F (2, 82) = 13.19, p < .001）。アメリカ人留学生は能力や個人的親しみやすさは高く評価されていたが，社会的望ましさは相対的に低く評価されていた。この効果に加え，MS を含む効果では MS ×プライム×特性の交互作用のみが有意であった（F (2, 82) = 4.81, p < .05）。特性ごとに MS ×プライムの分散分析を行うと，個人的親しみやすさの評定においてのみ交互作用が有意で（F (1, 41) = 5.09, p < .05：Figure 3），日本プライム条件では，MS 条件は統制条件に比べ，個人的親しみ

やすさを低く評定したが（$F(1, 41) = 6.88, p < .05$），博愛プライム条件では MS の効果が見られなかった（$F(1, 41) = 0.29, ns$）。この結果は，個人的親しみやすさ次元においてのみであるが，MS 状況では外集団への評価が低下するが，博愛概念が活性化していると，この効果が消失することを示すものである。

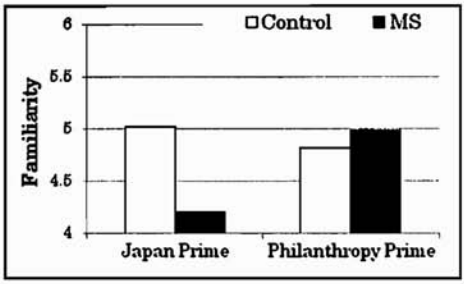

Figure 3. アメリカ人留学生の個人的親しみやすさ評定

韓国人留学生とイラン人留学生　韓国人とイラン人留学生に対して MS ×プライム×特性の混合要因の分散分析を行ったところ，韓国人の評定において特性の主効果が有意であったが（$F(1, 41) = 33.93, p < .001$; 能力は高く評定されていたが個人的親しみやすさは相対的に低く評定されていた），MS やプライムを含む効果で有意になる効果はなかった（$Fs < 2.43, ns$）。特性ごとに MS ×プライムの分散分析を行っても，MS やプライムを含む効果で有意になる効果はなかった（$Fs < 2.35, ns$）。

日本人大学生　日本人大学生に対する評定に対して MS×プライム×特性の混合要因の分散分析を行った。特性の主効果とプライム×特性の交互作用のみが有意であり（$F(2, 82) = 14.59, p < .001$; $F(2, 82) = 3.94, p < .05$），MS を含む効果で有意になったものはなかった。しかし，特性ごとに MS×プライムの分散分析を行うと，社会的望ましさの評定において，MS×プライムの交互作用が有意であった（Figure 4）。日本プライム条件では，MS 条件は統制条件に比べ日本人大学生の社会的望ましさを高く評定したが（$F(1, 41) = 4.99, p < .05$），博愛プライム条件では MS の効果が見られなかった（$F(1, 41) = 0.66, ns$）。この結果は，社会的望ましさの次元のみであるが，MS 状況では内集団への評価が高まるが，

博愛概念が活性化していると，この効果が消失することを示すものである。

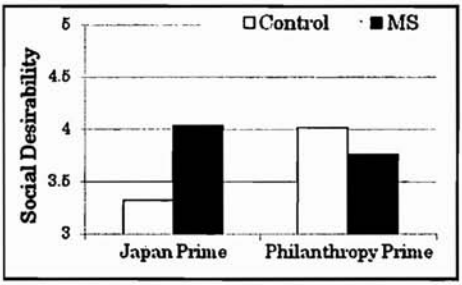

Figure 4. 日本人大学生の社会的望ましさ評定

考　察

死すべき運命の顕現化によって生じる内集団ひいきが，博愛概念の活性化によって止揚されるかを，日本人大学生を参加者として，内集団である日本人大学生と，外集団でかつ相対的にポジティブな評価を持たれている外国人留学生への評価を用いて検討した。日本をプライムした時には，死すべき運命が顕現化すると日本人大学生に比べた留学生への相対的評価が低下するが，博愛概念をプライムすると，死すべき運命が顕現化しても相対的評価は低下せず，有意ではないもののむしろ上昇していた。先行研究においては外集団への態度を主に問題としていたが，外集団に対する内集団との相対的評価においても，死すべき運命の顕現化によるネガティブな効果が博愛概念のプライムによって止揚されることが明らかとなった。

対象別に見ても，内集団である日本人大学生への評価では，社会的望ましさの評定においてのみであるが，MS による内集団への評価の上昇が，博愛概念の活性化によって抑制された。これらの結果から，これまで先行研究で示されてきた MS による外集団侮蔑ばかりでなく，MS による内集団高揚も，博愛概念の活性化によって抑制されることが明らかとなった。

外集団である留学生への評価を対象別に見ると，実験当時に相対的に日本と対立関係にある中国からの留学生において，MS による外集団侮蔑の強化の抑制が顕著であり，個人的親しみやすさ / 社会的望ましさ / 能力の次元を問わず

見られた。また，アメリカからの留学生では個人的親しみやすさ評価においてのみ同様のパターンが見られた。しかし，韓国やイランからの留学生に対しての分析では有意な効果は見られなかった，この結果は両国が日本の文化的世界観との関係が相対的に希薄であることによる可能性が考えられるが，この点についてはさらなる検討が必要であろう。

本研究のデータにおいて一番の問題は，統制（歯科）条件において，プライムによって評価に差が見られる点であろう。中国人留学生に対する評価では，日本をプライムした時の方が博愛概念をプライムした時に比べて評価が高くなり，プライム × MS の交互作用を MS の操作ごとの下位分析をすると，MS 条件ではなく統制条件においてのみ有意な差が見られていた（MS 条件：$F(1, 41) = 0.32$, *ns*，統制条件：$F(1, 41) = 8.26, p < .01$）。この結果は，博愛概念のプライムが，想定したものとは異なったものも操作していたことを示唆しているのかもしれない。可能性としては，博愛プライムが平和プライムであった可能性であり，中国は平和プライムによって評価が低下した可能性が考えられよう。しかし，この点に関しては，本研究のデータから明らかにすることは難しく，今後の検討が必要であろう。

存在論的脅威が必ずしも自文化中心主義や排外傾向を生み出すわけではないことが，近年の研究で示されるようになっており（e.g., Motyl, et al., 2011; Pyszczynski, et al., 2008），本研究もその知見にさらなるデータを提供するものである。本研究での博愛概念のプライムは，多くの人が知っている音楽（i.e.「ウィ・アー・ザ・ワールド」と「小さな世界」）と日常でも接触機会のある写真を用いて行った。このような日常生活の中で頻繁に接触する些細な手がかりによって，宗教的な規範が希薄といわれている日本において，存在論的脅威によって生じやすくなる内集団ひいき—自文化中心主義と排外傾向—の増大を抑えることができることは，大きな意味があるであろう。これまで報告されている研究で，友愛概念や博愛概念や人類の共通性のプライムは全て閾上で行われており，閾下プライムによる検討はおこなわれていない。そのため，友愛や博愛が意識に上ることが，存在論的脅威によるネガティブな効果を抑制するのに必要なのか，それとも無意識のうちの活性化で十分なのかは明らかとなって

いない。今後は閾下プライムといった無意識のうちの活性化においても同様な効果が得られるかを検討していく必要があろう。このような研究の積み重ねにより，人が高度な知能を持ったがゆえに生じる存在論的脅威に伴うネガティブな行動を抑制する有効な手段を明らかにすることができるであろう。

【引用文献】

Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1990). Anxiety concerning social exclusion: Innate response or one consequence of the need for terror management? *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 702-709.

Greenberg, J., Simon, L., Pyszczynski, T., Solomon, S., & Chatel, D. (1992). Terror management and tolerance: Does mortality salience always intensify negative reactions to others who threaten one's worldview? *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 212-220.

Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural wordviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna(Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. (Vol. 29, pp. 61-139). San Diego, CA: Academic Press.

Harmon-Jones, E., Greenberg, J., Solomon, S., & Simon, L. (1996). The effects of mortality salience on intergroup bias between minimal groups. *European Journal of Social Psychology*, 72, 24-36.

Heine, S. J., Harihara, M., & Niiya, Y. (2002). Terror management·in *Japan*. *Asian Journal of Social Psychology*, 5, 187-196.

Hirschberger, G., & Ein-Dor, T. (2006). Defenders of a lost cause: Terror management and violent resistance to the disengagement plan. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 761.769.

Jonas, E., Schimel, J., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (2002). The Scrooge effect: Evidence that mortality salience increases prosocial attitudes and behavior. P*ersonality and Social Psychology Bulletin*, 28, 1342-1353.

McGregor, H. Lieberman, J. D., Solomon, S., Greenberg, J., Arndt, J., Simon, L., & Pyszczynski, T. (1998). Terror management and aggression: Evidence that mortality salience motivates aggression against worldview threatening others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 590-605.

Motyl, M., Hart, J., Pyszczynski, T., Weise, D., Maxfield, M. & Siedel, A. (2011). Subtle priming of shared human experiences eliminates threat-induced negativity toward Arabs, immigrants, and peace-making. *Journal of Experimental Social Psychology*, 47, 1179-1184.

野寺綾・唐沢かおり・沼崎誠・高林久美子 (2007). 恐怖管理異論に基づく性役割ステレオ

タイプ活性の促進要因の検討 社会心理学研究, 23, 195-201.

沼崎誠 (2005). 死すべき運命の顕現化が性役割的偏見に及ぼす効果 科学研究費補助金（基盤研究 (C)）研究成果報告書　潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプ受容における心理過程の検討（研究代表者：沼崎誠）, pp. 63-90. http://www.repository.lib.tmu.ac.jp/dspace/bitstream/10748/ 2164/1/10040-001.pdf

Pyszczynski, T., Abdollahi, A., Solomon, S., Greenberg, J., Cohen, F., & Weise, D. (2006). Mortality salience, martyrdom, and military might: The great Satan versus the axis of evil. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 525–537.

Pyszczynski, T., Greenberg, J. & Solomon, S. (2005). The machine in the ghost: A dual process model of defense against conscious and unconscious death-related thought. In J. P. Forgas, K. D. Williams, & S. M. Laham (Eds.), *Social motivation: Conscious and unconscious processes*. New York: Cambridge University Press. Pp. 45-54.

Pyszczynski, T., Rothschild, Z. K., & Abdollahi, A., (2008). Terrorism, violence, and hope for peace: A terror management perspective. *Current Directions in Psychological Science*, 17, 318-322.

Rosenblatt, A., Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., & Lyon, D. (1989). Evidence for terror management theory I: The effects of mortality salience on reactions to those who violate or uphold cultural values. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 681-690.

Rothschild, Z. K., Abdollahi, A., & Pyszczynski, T. (2009). Does peace have a prayer? The effect of mortality salience, compassionate values, and religious fundamentalism on hostility toward outgroups. *Journal of Experimental Social Psychology*, 45, 816-827.

Solomon, S., Greenberg, J., Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 24., pp. 93-159) New York: Academic Press.

1) 本稿は第 1 著者の指導のもとで行った第 4 著者の卒業研究のデータに基づいている。本研究の一部は日本グループ・ダイナミックス学会第 58 回大会において発表した。本研究の実施には科学研究費補助金（システム再生産に寄与する心理メカニズムの検討－社会変革の促進に向けて－（基盤研究 (C), 研究代表者：沼崎誠, 課題番号：22530675）を受けた。

2) 首都大学東京 人文科学研究科

3) 首都大学東京　都市教養学部（現所属：神奈川県庁）

4) 一橋大学 社会学研究科

5) アメリカ人留学生の個人的親しみやすさ（α =.52）と社会的望ましさ（α =.65）, 中国人留学生の個人的親しみやすさ（α =.70）, 日本人大学生の社会的望ましさ（α =.53）で信頼性係数が低かったが, それ以外の 11 特性では α 係数は .80 以上の値を取っていた。

Appendix 1　プライム操作

日本プライム選択写真例

博愛プライム選択写真例